

「目から涙がぬぐわれる日」
ヨハネの黙示録 7 章 9－17 節

「私たちの国籍は天にある。そこから、救主、主イエス・キリストの来られるのを、私たちは待ち望んでいる。」（フィリピ 3：20）とあるように、私たちは天の御国を仰ぎながらこの地上を歩んでいます。しかし、それゆえに、私たちがキリスト者としてこの世を生きようとする時、信仰者ゆえの困難に見舞われることがあるのです。

黙示録のキリスト者たちは、皇帝礼拝を拒否したためにローマ帝国の迫害を受けることになりました。拝めば迫害はなかったことでしょう。しかし、拝めばキリスト者ではなくなってしまう恐れがあります。このことは、まさにイエスさまが言われていたことでした。

「あなたがたが世に属していたなら、世はあなたがたを身内として愛したはずである。だが、あなたがたは世に属していない。私があなたがたを世から選び出した。だから、世はあなたがたを憎むのである。」（ヨハネ 15:19）

しかし、その迫害の中にあってヨハネは、数え切れない人たちが神を賛美している幻を見るのです。「この後、わたしが見てみると、見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、大声でこう叫んだ。『救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊とのものである。』」（9-10 節）

彼らは大声でこう叫びました。「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊とのものである」と。当時は、ローマの皇帝が「救い主」と呼ばれていました。しかし彼らは、「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と小羊とのもの、つまり、イエス・キリストのものである」と大声で叫ぶのです。これは力強い信仰告白とも言える言葉です。

そして、この信仰告白の言葉に呼応するように、天使たちも神を礼拝してこう言うのです。「アーメン。賛美、栄光、知恵、感謝、誉れ、力、威力が、世々限りなくわたしたちの神にありますように、アーメン」と。

天使たちは「彼らの信仰告白は、アーメン、本当にそのとおりだ」と言うのです。そして、その告白に応えるかのように天使たちも、賛美しないではいけないのです。「賛美、栄光、知恵、感謝、誉れ、力、威力が、世々限りなくわたしたちの神にありますように、アーメン」。このように、天においては、白い衣をきた大群衆と無数の天使たちが、心を一つにして神さまとイエスさまを礼拝しているのです。そして、この礼拝は、今、地上にある私たちの礼拝ともつながっています。なぜなら、私たちも、「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊とのものである」という告白に「アーメン、本当にそのとおりです」と信じている者だからです。

しかしながら、私たちには、生きてると実にいろいろなことが起こってきます。楽しいことばかりではなく、人生こんなはずではなかったと思うような出来事にも出会うかもしれません。苦しみや悩み、困難は、私たちを取り囲んでいます。私たちの心はどれだけ涙を流しているのでしょうか。

でも、いつの日か、終わりの日において、小羊なる主イエス・キリストが私たちから飢え渴きを取り除き、私たちを命の泉に導いてくださる、私たちの目から涙をぬぐってくださる、その希望を聖書は私たちに伝えてくれています。「彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、太陽も、どのような暑さも、彼らを襲うことはない。玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、命の水の泉へ導き、神が彼らの目から涙をことごとく、ぬぐわれるからである。」(16-17 節)

この「玉座の中央におられる小羊」なる救い主イエス・キリストは、どこか遠く離れたところから、ただ私たちを見守っておられるのではありません。15 節に「この者たちの上に幕屋を張る」とあったように、神さまは私たちのすぐ傍らにいてくださっています。私たちのすぐ近くで、共に喜び、共に涙を流しながら、私たちの目から涙をぬぐおうとしてくださっているのです。

主が私たちの牧者となって、私たちの目から涙をことごとくぬぐわれるときが来る、そのことを希望として、「御国が来ますように」と祈りつつ、これからも一步一步、ご一緒に歩んでまいりたいと願います。